第４回

カッターナイフ持って泣く元受刑者　偶然の再会で保護司がかけた言葉

有料記事　「立ち直り」を考える

島崎周　２０２４年７月２６日 ８時００分

コメントプラス

マライ・メントラインさんのコメント

冷え込みが厳しい冬の夜。たまたま立ち寄ったコンビニで、見覚えのある30代の男性が出てきた。

保護司の長谷川洋昭さん（51）にとって、2年ぶりの偶然の再会だった。男性は、覚醒剤を使用した罪で服役していた元受刑者。仮釈放になってからの半年の保護観察期間、生活状況を聞くなどしていた。

保護司を務める田園調布学園大子ども未来学部の長谷川洋昭教授=2023年3月14日午後2時10分、川崎市、島崎周撮影

男性は半泣き状態で、駆け寄ってきた。

「先生！　ああ、やっぱり先生とは運命です！」

「久しぶりやね、どないしたん？」

「今から人を殺しに行こうと思って、カッターナイフを買ったんです」

見ると、男性が持つレジ袋には、やや大きめのカッターナイフが入っていた。

ぎょっとしたが、怖くは感じなかった。

男性は緊張が解けたのか、せきを切るように話し始めた。

知人に借金をし、返金したにもかかわらず、さらに金を要求されているという。知人は男性の前科のことも周囲に触れ回っているようだった。

「このままだと彼女にも迷惑がかかるし、仕事も失う。人生がめちゃめちゃになると思って。もう殺すしかないと思ってしまったんです。どうしたらいいのかわかりません」

「そうなんや、それはつらかったなぁ。もう少し話をしよ」

そう声をかけ、近くの喫茶店に入った。

男性はこの2年の間にあった出来事を語り始めた。次第に様子が落ち着き、1時間ほど話を聞いたところで長谷川さんは切り出した。

「もしこれでその人を刺したら、自分も加害者になってまう。彼女や親御さんも泣くことになる。おれも一緒にどうしたらいいか考えるから、安心しい」

「何かあったら、おれの顔を思い出してなぁ」

男性は落ち着いた様子で言った。

「相談することすら思いつかないくらい、追い詰められていました。保護観察の時はあんなに相談していたのに。もっと早く相談すればよかったです」

「これからは何か困ったことがあったら、おれの顔を思い出してなぁ」

そう声をかけ、別れた。男性は買ったカッターナイフを長谷川さんに預けていった。

再犯を防ぐことは、本人の努力だけでは難しいこともある。

長谷川さんは改めて思った。

保護司は、犯罪や非行をした人たちと定期的に面接し、更生を図るための順守事項を守るよう指導し、生活上の助言や就労の手助けなどをするボランティアだ。非常勤国家公務員で、保護観察を民間で担う保護司制度は世界でも珍しい。

保護司になると、関係法令の内容や面接の方法など、基礎的な知識を身につけるための研修を受ける。仮釈放者や家庭裁判所から保護観察の処分を受けた少年ら「保護観察対象者」を保護司の家に呼んだり、対象者の家を訪問したりして生活状況などを聞き、相談に応じて指導・助言を行う。

「近所のおっちゃんです」同じ地域住民だと伝える

毎月1回、これらの内容を「報告書」にまとめ、保護観察所に提出する。保護観察中に何かトラブルが起こった際は、保護司が保護観察官に連絡する。対象者が刑務所にいる段階から、出所後の住む場所や引受人についての調整をすることもあるという。

保護司が作成して毎月、保護観察所に提出する「保護観察経過報告書」（手前）。保護観察対象者との接触の状況や面接の内容などを記すものになっている=長谷川さん提供

長谷川さんが保護司になったのは2013年。もともとは警察官を志していたこともあり、犯罪者に対しては憎しみの気持ちが強かった。だが、大学などで福祉を学ぶうちに、「彼らが更生したら、新しい被害者は生まれないかもしれない」と思うようになった。大学院時代の指導教員からの勧めもあり、保護司になった。

この11年で、薬物を使用した罪で服役した受刑者や元暴力団員ら約20人と向き合ってきた。更生保護を専門に田園調布学園大子ども未来学部の教授も務める。

月2回、自宅に招いて1時間程度の面談をする。相手にはいつも「近所にいる普通のおっちゃんです」と伝える。互いの近所にあるスーパーやラーメン屋といった地域の話題に触れることで、同じ地域住民であることを認識してもらうという。

犯した罪のことは、必要以上に問い詰めない。「再犯をとどめるのは、反省より人とのつながり」と思うからだ。

「更生とは何か」を考える

「更生」とは何なのか――。

大学の授業では必ず、覚醒剤使用の罪で服役した別の元受刑者の話をする。

「先生、おれ覚醒剤を使ったことは全然悪いとは思ってません。あれほど便利なクスリはありませんよ。仕事もプライベートもがんばれるんです」

「そうなんやね。じゃあまた手を出すの？」

「いえいえ、もう絶対に手は出しません。やりたいけど、絶対やりません」

「やりたいけどやらない。それはなんでなんかな？」

「だっていろいろと損をするからです。刑務所に入って、家族や彼女に会えないのは本当につらかったです。悲しませてしまったことがつらかった。働いていた会社の社長にも迷惑をかけてしまった。それなのに、またこうやって雇ってくれている。もう裏切れません」

「偉いやん、立派やんか」

元受刑者を褒めたといい、学生に問う。

「この人は更生していると思う？」

学生たちの回答は、「更生している」「更生していない」で、だいたい半々に分かれるという。

更生支援に関わる人や当事者の交流の場、毎月1回開催

「自分だって、ずるいことや人には言えないような悪いことを考えることもある」と長谷川さん。でも、それを行動に移すかと言えば、その一線を越えてはこなかった。内心と行動は分けて考える必要があると考える。

「反省は必要な要素だが、再犯したら意味がない。ならば、再犯しないことが更生しているとしか言いようがない」

実際に、反省していても再犯してしまう人はいた。

どうして事前に気づくことができなかったのか。もっと自分が寄り添うことができなかったのか。

保護司として関わるのは、定められた保護観察期間だけ。その間は様子を見ることができても、その後は保護司から積極的に対象者に連絡をとることはない。

保護観察期間が終わっても、フラットな関係を築けるような場を提供できないか。

そんな思いから16年、新宿周辺で更生保護に関心のある人や当事者のための交流の場として「新宿19の会」を立ち上げ、代表を務める。毎月19日に開く食事会には、元受刑者や支援者、警察官、法務省職員、報道関係者らが毎回20～30人ほど集まる。

保護司殺害の事件、「元受刑者も不安になっているのでは」

それぞれがみんなの前で自己紹介するのがルール。「薬物で長年服役してきたが、今は刑務所から出てきた人の支援をしたいと思っている」「犯罪を経験したからこそわかることがあるので、それを社会のために発信したい」。元受刑者の発言に、あたたかい拍手が送られ、みんながざっくばらんに語り合う。

今年6月には、大津市で保護司を殺害したとして、保護観察中の男が逮捕される事件があった。保護司から不安の声もあるが、保護観察対象者の人たちの方が、世の中から「やはり一度でも罪を犯した人は危険なんだ、と思われてしまう」と感じ、不安になっているのではないかと思う。事件があったからといって、接し方を変えるつもりはない。

保護観察対象者の刑期満了を祝して、長谷川さんが送ったメッセージとお菓子=長谷川さん提供

スマホには、これまで出会った元受刑者たちの連絡先がいまも保存されている。普段のメッセージが届いた際の通知音は鳴らない設定にしているが、元受刑者たちだけは、すぐに気がつけるよう、音を出す設定にしている。

立ち直りとは、「手の伸ばし方を知ること」ではないかと考える。誰しも1人で生きていくことはできない。困った時、どこに、どのように手助けを求められるか。それができることが「立ち直り」だと思っている。

だから、元受刑者たちにはいつも言う。

「何かあったら、とにかくおれの顔を思い出してなぁ」

保護司の減少、高齢化の問題も

保護司になるには、専門的な知識・経験や資格が必要とされているわけではないが、人格及び行動について、社会的信望を有することや、生活が安定していることが条件で、禁錮以上の刑に処せられた人などは対象外。

保護観察所に申請すると、条件等を踏まえて法務大臣への推薦の適否について検討され、法務大臣によって委嘱されるしくみだ。

全国保護司連盟によると、保護司の定数は保護司法にもとづき、全国5万2500人と定められている。だが近年は担い手不足の状況だ。再任の運用が変わり、若干増加したものの、20年以降は4万7千人を下回る状況が続き、高齢化も進んでいる。

昨年3月に閣議決定された第2次再犯防止推進計画では、「保護司活動の支障となる要因の軽減などについて検討を進め、保護司活動の基盤整備を一層推進していく必要がある」としている。（島崎周）

「立ち直り」を考える　デザイン・廣戸美香

この記事を書いた人

島崎周
東京社会部

フォロー

専門・関心分野

性暴力、性教育、被害と加害、宗教、人権、文化

コメントプラス

注目コメント試し読み

マライ・メントライン（よろず物書き業・翻訳家）2024年7月26日8時0分 投稿

【視点】世間の空気感の実態として「目的や社会的意義はどうあれ、もと犯罪者にかかわること自体、生活上のリスクを爆上げする」というマインドの定着と深化があるように感じられる。ありていにいえば「自分自身も心身の余裕があるわけでないのに、特にそんなハイリスクな相手の面倒を見てられっか」ということだろう。

…続きを読む

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。
Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.